

松下幸之助記念志財団 研究助成

## 研究報告

(MS Word)

## 【氏名】

孫瀟夢

## 【所属】(助成決定時)

東京藝術大学

## 【研究題目】

1980年代における中国楽器奏者の来日とその背景:東京を中心に

## 【研究の目的】(400字程度)

1972年の日中国交回復と1977年以後の中国国内の時局の落ち着きと共に、日中文化交流が本格的に開始された。1980年からNHKが放送したシルクロード番組は日本全国でシルクロードブームを引き起こし、シルクロードと関連の深い中国の文化も80年代の日本において人気だった。1980年代において、留学・移住のため来日した中国楽器奏者の活動は、日本での中国音楽の受容に大きく影響した。具体的には、中国音楽演奏会の開催、日本人音楽家との交流、及び中国楽器の教授活動によって、日本に中国音楽が「根」を下したのである。

本研究は、1970年代、1980年代の日本中国伝統音楽交流史の全体像の解明を目的にする。研究助成期間における、主に日本での中国音楽の受容を大きく促進させた1980年代に来日した中国楽器奏者の移住背景・留学経緯及びその影響を明らかにした。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

本文は、1980年代の中国演奏会関係資料の調査、及び来日奏者へのインタビューの二つの方法で、以下の三つの内容について論述した。

## ・「来日背景」

1980年代日本に移住した中国楽器奏者のほとんどが留学生として来日した。本研究は、留学生を含め1980年代に日本に移住した中国楽器奏者の概況を検討するものであるため、両国の留学政策変化及び来日奏者の人数によって、(1)1983年までの「第一期」と、(2)1984年～1989年の「第二期」の二つに分けて分析した。2021年9月までの調査結果(東京を中心に)によって、合計28名の存在が確認できた。彼らの来日背景は結論に分析した当時の両国の政治・経済に大きく影響された。

## ・「中国での所属先の違いとその影響」

「第一期」奏者の殆どが中国の歌舞・戯劇団体に所属していたことは、一つの大きな特徴である。現在の中国音楽団体が音楽学院より奏者を招聘するのに対して、1980年代初めの各音楽団体の団員は入団試験で選ばれた民間奏者の方が多かった。それらの民間奏者は、「口伝」によって楽器を学習した者が少なくない。演奏面において、五線譜の読譜の困難や、演奏する音楽ジャンルの狭さ等の問題は、「第一期」奏者が1980年代後半の日本での活動が減少した理由ではないかと推測する。

一方で、「第二期」奏者は殆ど、プロの音楽団体もしくは国立の音楽学院の出身者であった。団体や学校で修得した総合的な音楽の基礎力は、彼らの日本での活動が可能となった重要な要因となった。

## ・「日本作曲界への関心」

上述の中国楽器奏者は、1980年代の日本で教習、演奏会、洋楽器・和楽器とのコラボレーション等の活動以外に、独学あるいは日本人の作曲家に師事して作曲技法を修得したことも一つの特徴である。

中国で既に作曲の勉強を始め、来日後も演奏・作曲の活動を両立した人物として、「第一期」奏者の劉宏

軍、劉錦程がいる。また、留学生に対して早くから門戸を開いていた音楽学に入学し、後に作曲領域に活動を広げたのは王明君、左継承、賈鵬芳等である。日本の音楽大学の作曲専攻へ直接留学したのは、張曉輝、蘇宇虹、姜建華、劉繼紅である。日本の作曲界への注目は、1976年、1978年、1981年の日本中国文化交流協会より派遣された「日本音楽家訪中団」の中国音楽団体及び音楽学院との交流関係によるところが大きい。

#### 【結論・考察】（400字程度）

文革終息後に来日した「第一期」奏者の来日経緯には、主に残留邦人の帰国、文革後の中国からの脱出及び日本の中国音楽研究機関の招待の三つがあった。1980年代半ば以降、①中国人の現代日本への憧れ、②私営企業への転換による仕事場の激変とポップスの流入による伝統音楽の観衆・収入の減少、③自費留学の開放(中国)・「留学生10万人計画」(日本)、の三つの社会要因によって、1980年代半ばから1990年代初めにかけて、中国楽器奏者の日本への移住・留学がピークに達した。

1980年代来日奏者のもう一つの特徴は、日本人作曲家への関心である。来日奏者は、音楽活動をしながらか、独学あるいは日本人に師事して作曲を勉強した。その理由は自作曲で自分の演奏活動を後押しする以外に、1970年代後半から1980年代にかけての「日本音楽家訪中団」の中国との交流活動の影響も不可欠な要因である。1977年以降、文革の終息、改革開放政策に伴い、多くの日本人音楽家・音楽団体が中国に対して訪問・交流・演奏などの活動を行った。これらの交流活動は中国の音楽団体および音楽学院の演奏家・学生に対して、当時の日本の作曲法・作品の進歩性を伝え、中国の音楽家に対して大きな衝撃を与えたのであった。